2歳児

ラーニングデザインを新たに作成し、養護と教育を一体的に行う教育的意図をもった働きかけを記載しました。また、カリキュラムにおいても、生活や遊びが大人との関係から子ども同士の関わりへと広がっていくことをより意識し充実させています。

安全教育や防災・減災教育等により、安全を守る力の育成

子どもが健やかに成長していくためには、生命が守られ、安全な環境のもとで一人ひとりの心の安定が図られなくてはなりません。健康で安全な生活は、園所の基盤であり、子どもたちに関わる大人の責任でもあります。その上に立って、安心で安全な生活が送れるように見通しをもって、安全教育に取り組むことが大切です。

平成28年までの5年間に歩行中の交通事故で死傷した人の年齢は、小学1年生が最も多く、その3分の1が登下校中に起こっています。友達の行動の危険性は指摘できても、自分の行動の危険性を予測できないという幼児期の発達の特性を踏まえ、友達や周囲の人の安全にも関心を向けながら、次第に幼児が自ら安全な行動をとることができるようにする必要があります。

また、自然災害（地震、風水害等）も多い中、防災・減災教育も重要視されており、日々の実践の中で何が必要か、指導者・保育者や地域の方等と共に考え、安全教育や防災・減災教育を通して、安全を守るために主体的に行動できる力の育成が必要です。

この改訂では、乳幼児期における安全教育年間計画例や避難訓練実施例、交通安全の取組例を掲載し、活用できるようにしています。

小学校教育への接続

小学校以降の生活や学習基盤の育成につながることに配慮し、乳幼児期にふさわしい生活を通して、主体的な生活態度や創造的な思考等の基礎を培うようにすることが重要です。「就学前教育カリキュラム」は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領や小学校学習指導要領、大阪市教育振興基本計画を受けたものであり、「就学前教育カリキュラム」の活用・実践を通して育成された「知・徳・体」のバランスのとれた「生きる力の基礎」が、各校種で育成される「育みたい力」と合わさって、小学校以降の生活や学びの充実、そして生涯にわたる自己実現につながっていきます。（P16図参照）

また、「就学前教育カリキュラム」は、「知・徳・体」のバランスのとれた「生きる力の基礎」を育む過程や、小学校低学年での学びの過程で表出される子どもの姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）で捉えることで、就学前教育と小学校教育の接続の強化が一層図られるようにしました。

その他

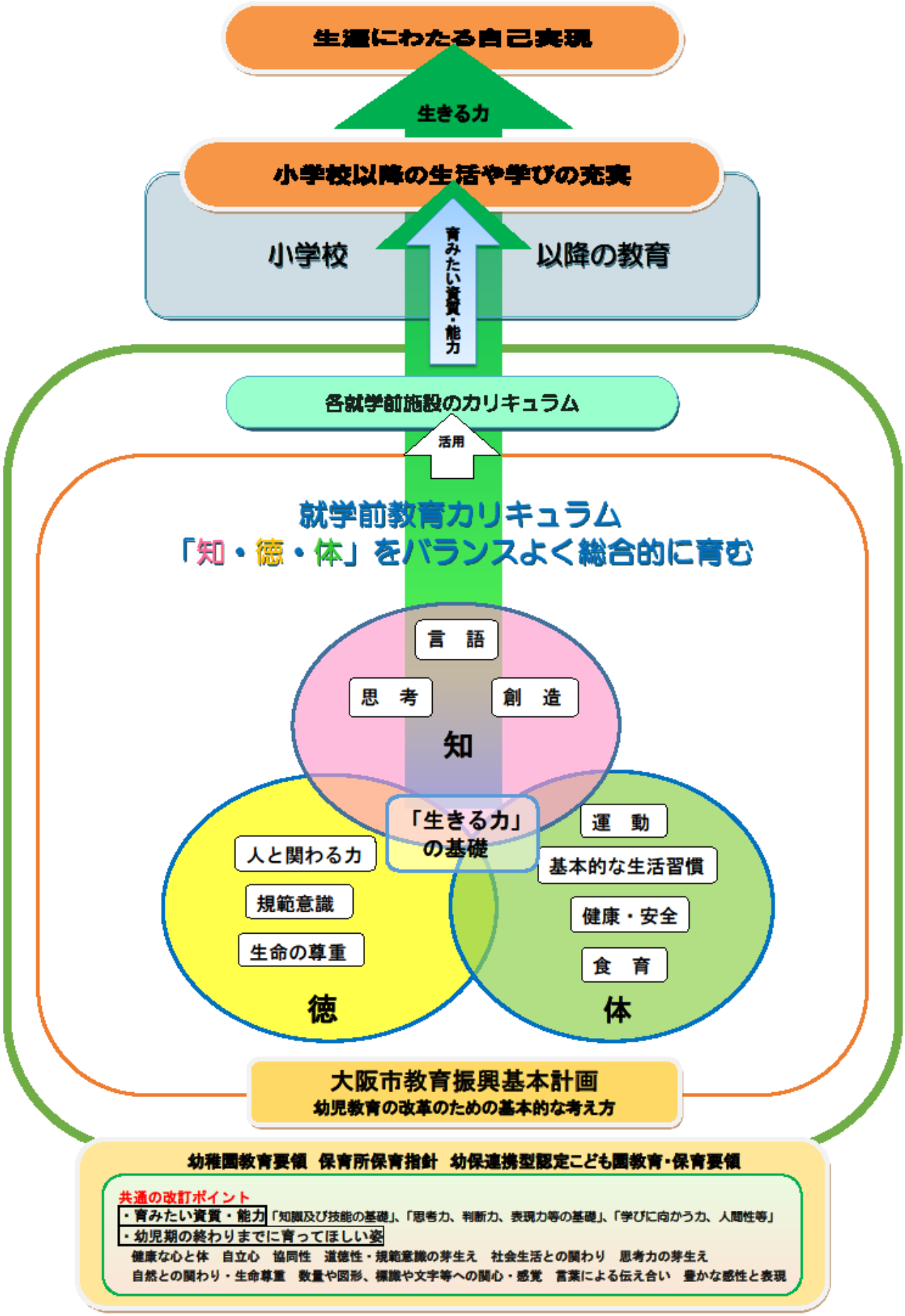
平成 27 年３月策定の「就学前教育カリキュラム」の実践を通して見えてきた課題についても、以下の点を充実させました。

・「徳」の参考事例の充実
・「教育的意図をもった働きかけ」の観点として「協同性」と「道徳心」を追加
・就学前教育における「評価」の考え方を追加

次ページの図は、「就学前教育カリキュラムの考え方」を表しています。

各就学前施設が自園自所の教育・保育に「就学前教育カリキュラム」を活用し、乳幼児期の発達の過程や一人ひとりの子どもの育ちの理解のもと、子どもたちの自主的な活動としての遊びを通して、「知・徳・体」をバランスよく総合的に育んでいくことで、「生きる力の基礎」が培われていきます。そうして培われた「生きる力の基礎」が、小学校以降の教育におけるそれぞれの校種での「育みたい資質・能力」と合わさって、小学校以降の生活や学びを充実させ、やがては生涯にわたる自己発揮や自己実現につながっていくことを表しています。

―就学前教育カリキュラムの考え方―



（3）就学前教育における評価

就学前教育における評価は、一人ひとりの乳幼児が「今、何に興味をもっているのか」「何を実現しようとしているのか」「何を感じているのか」等、乳幼児理解から始まります。そして、日々の実践の中で、一人ひとりの乳幼児の姿がどのように変容しているのかを見取り、その姿が生み出されてきた「環境構成」や「働きかけ」「活動のねらいや内容」について振り返り、教育・保育をよりよいものに改善していこうとすることが乳幼児期の教育・保育における評価です。

乳幼児理解に基づいた評価を行う際には、他の乳幼児との比較や一定の基準に対する　　達成度についての評定によって捉えるものでないことに留意する必要があります。乳幼児の発達は、たとえ同年齢であってもそれぞれの生活経験や興味・関心などによって一人ひとり異なっています。一人ひとりの乳幼児がそのよさを発揮しつつ、育って行く過程を重視する必要があります。

評価の実施にあたっては、指導や保育の過程を振り返りながら、乳幼児がどのような姿を見せていたか、どのように変容しているか、そのような姿が生み出されてきた状況はどのようなものであったかという乳幼児理解を進め、乳幼児一人ひとりのよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるもの等を把握し、乳幼児理解につなげることが大切です。そして、その振り返りを通して、指導や保育が適切であったかどうかを把握し、その改善に生かすことが大切です。このことは、教育・保育の質を高めるとともに自らの専門性の向上にもつながっていきます。

評価の視点として、各領域のねらいや「知・徳・体」の視点のほか、５歳児については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた視点から見ていくことも必要です。

また、評価の妥当性や信頼性が高められるよう、複数の指導者・保育者で、それぞれの判断の根拠となっている考え方を突き合わせながら同じ乳幼児のよさを捉えたりして、より多面的に乳幼児を捉える工夫をし、評価に関する施設内の研修を通じて、施設全体で組織的に計画的に取り組むことが大切です。

本カリキュラムでは、参考事例において、事例の考察で、「活動のねらい」や「教育的意図」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等の視点で実践を振り返り、教育・保育の改善につなげています。

（4）全ての大人が乳幼児期に大切にしたいこと

子どもが心身共に健やかに育つためには、養育に関わる大人は、子どもの命を守り、一人ひとりが快適に、そして健康で安全に過ごせるように配慮しなければなりません。生理的欲求が十分に満たされ、健康増進が積極的に図られるように努め、一人ひとりの子どもの生存権を保障しなければなりません。子どもは、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、自分の存在を認められ、受け入れられているという安心感を得ることができます。大人との相互の関わりが十分に行われることで、愛着関係が築かれていきます。愛着関係がしっかりと形成されることで、大人は子どもにとって安心できる存在（心の安全基地）となり、子どもはいろいろな遊びや生活を心ゆくまで楽しみ、自分のできることや可能性を広げていけるのです。子どもが自ら環境に関わる姿を見守り、共感しながら、ときには励まし、必要な助言をして大人も一緒に楽しむことが必要です。

子どもが、自分でできることの喜びや自信をもつことができるように援助するとともに、できたことを褒めるだけでなく、自分でしようとする意欲や姿勢を十分に見守り、認めていくことが必要です。成長の途上で、自分でやりたい気持ちがかなえられず、思い通りにいかないことで泣いたり、かんしゃくを起こしたりする姿も見られます。反抗しながらも大人に依存するなど、子どもの自立は一直線に進むのではなく、依存と自律を繰り返し、行きつ戻りつしながら成長していくものです。子どもが自ら選択して行動できるよう、大人はじっくりと待つ姿勢と子どもの育ちを理解することが必要です。子どもは徐々に、目標や期待をもって活動するようになりますが、失敗を恐れて活動することをためらったり、試行錯誤するなか、やり続ける気持ちが途中で衰えてしまったりすることもあります。そうした気持ちを、敏感に感じ取り、認め、励まし、意欲を高めていくことが大切です。

子どもが自立して行く過程には、いろいろなできごとが待ち受けていますが、子どもの内面を理解し、真に求めている姿に即してその都度、適切な援助をすることで、自分のできることや可能性を広げていくことができます。子どもを主体として尊重し、受け止め認めるという人権を尊重した関わりを大切にすることで、子どもたちは自分が大切にされていると確信し、自分を前向きに捉え、自信をもつ「自己肯定感」の育成につなげていくことができます。

乳幼児期は、心身の発育が著しく、人格の基礎が形成される時期です。個人差が大きいこの時期の子どもたち一人ひとりの健やかな育ちを保障するためには、生活全体の連続性を踏まえて、子どもを取り巻く全ての大人（家庭や地域、幼稚園・保育所・認定こども園の指導者・保育者等）が連携をとりながら、子どもへの愛情や成長を喜ぶ気持ちを伝え合い、共に育てるという意識をもち、育ちを支えていくことが大切です。

おいしいね!

あーん

ぼくも
見たいなあ

あ・・・れ　？

なんか、ついてる

ほんとやー

くぐってみよう

わあ!
トンネルや

第2章

カリキュラムと
ラーニングデザイン

1　0歳児・1歳児のカリキュラム

【0歳～2歳 11 か月頃】

新生児から2歳 11 か月頃のカリキュラム

知
徳
体

「子どもの育ち」
「経験させたい主な活動」
「教育的意図をもった働きかけ」
「家庭との連携」
で示しています。

歳児

歳　か月頃～　歳　か月頃

ねらい		
	発達のめやす（　歳頃～　歳　か月頃）	
子どもの育ち	知	
	徳	
	体	
経験させたい主な活動		
教育的意図をもった働きかけ	知の視点から	
	徳の視点から	
	体の視点から	事例 4

各時期の子どもの発達を踏まえ、育みたい姿に向けたねらいを示しています。（0 歳～2 歳は 3 か月ごと）（2 歳～3 歳は 6 か月ごと）の期間で表記しています。

一人ひとりの発達の道筋を理解しながら、成長の過程として受け止めてもらいたいので「発達のめやす」と表記しています。

子どもの発達を踏まえ、発達に応じて経験させたい活動を具体的に表記しています。

発達のめやすを踏まえ、経験させたい主な活動に対する教育的意図をもった働きかけを知・徳・体の視点から記載しています。

教育的意図をもった働きかけを、より具体的に示している事例番号を掲載しています。

家庭との連携

家庭での生活と就学前施設での生活の連続性は、子どもの育ちを支えるために欠かせないものです。保育の意図を理解できるように説明すること、保護者の疑問や要望には対話を通して対応すること、保育者と保護者の間で子どもに関する情報の交換を細やかに行うこと、子どもへの愛情や成長を喜ぶ気持ちを伝え合い保護者との相互理解を図ることが必要です。

０歳児から２歳児までの時期は、身体面での著しい発達や発育が見られる重要な時期です。身近にいる大人が、子どもが示す様々な行動や欲求に受容的・応答的に関わることにより、特定の大人との間で情緒的な絆が形成され、愛着関係へと発展し、情緒の安定が図られます。こうした情緒の安定を基盤として心身の発達が促されるなど、人として生きていく土台がこの時期に作られます。

また、この時期は、周囲の人や物、自然など様々な環境との関わりの中で、少しずついろいろなことを理解し、分類しながら自己という感覚を獲得していきます。乳児期からの保育の積み重ねは、その後の成長や生活習慣の形成、社会性の獲得などにも大きな影響を与えるものであり、子どもの主体性を育みながら保育を行うことが大切です。その際、発達の連続性を意識するとともに、３歳児以降の成長の姿についても意識して保育を行うことが重要です。

このようなことから、この時期においては子ども一人ひとりの発達過程や状況を十分に踏まえ、個別的な計画を作成する必要性があり、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的計画を作成する際に参考となるよう、３か月ごとの発達のめやすを示しました。また、発達を踏まえ育みたい姿に向けたねらい、さらに発達に応じて経験させたい活動を具体的に表記しました。

ここで示した発達のめやすは、年齢・月齢区分になっていますが、均一的な育ちの基準として見るものではありません。子ども一人ひとりの育ちには違いがあること、子どもの育ちの過程として理解し、一人ひとりの子どもに応じた援助のあり方を考えるために示したものです。

また、保育所保育指針では、保育における「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助である。さらに「養護」と「教育」が一体となって展開されるものであることに留意する必要があると示されていることから、「教育的意図をもった働きかけ」には「養護的関わり」も含め、さらに知・徳・体の視点から記載しています。

＜指導上大切にしたいこと＞

０歳児は、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達するとともに、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成される時期です。これらの発達の特徴を踏まえ、保育者が愛情豊かに受容的、応答的に関わることが特に大切です。

１歳児は、基本的な運動機能が次第に発達し、身体的機能が整うとともに、指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱等、保育者の援助の下、自分で行うようになります。また、発声が明瞭化し、自分の意思や欲求を言葉で表出しようとする時期なので、生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、受容的、応答的に関わることが必要です。

0歳児カリキュラム

（ 新生児～56日頃 ）（ 56日頃～3か月頃 ）

ねらい	○見る、聞く、触れるなどの、様々な感覚を経験する ○あやされると笑ったり、声を出したり、保育者との応答的な関わりを喜ぶ ○個々のリズムで安定して眠り、飲み、機嫌よく過ごす		
		発達のめやす（ 新生児～56日頃 ）	発達のめやす（ 56日頃～3か月頃 ）
子どもの育ち	知	○明るい光や音がする方向に反応を示す ○快（授乳後、目覚め、入浴後、あやされている時など）と不快（空腹、眠い、おむつが汚れている時など）の様々な感情を、泣くなどの行動や表現で表す	○光（明るい光、優しい光等）に反応する ○機嫌がよいときなど「アー」「ウー」という声を出すようになる
	徳	○大人に抱かれたり、優しく言葉がけをされたりなど関わってもらうことで、受け止めてもらえる心地よさを感じる ○保育者の顔等、目の前の物をじっと見つめる	○不快感が芽生え、空腹になったりおむつが汚れたりすると、目覚めて泣く ○抱かれると泣き止んだり、安心した表情になったりする ○あやされたり話しかけられたりすると、よく笑うようになる ○音や人の声の方に反応し、その方向を見る
	体	○物を持たされると、少し握りしめる ○おむつ交換時や入浴時に手足を動かす ○目覚めている時は、両手を体の横に伸ばしたり、手足を盛んに動かしたりする ○寝ている時は、頭は左右どちらかを向き、腕は肘を曲げてやや握っている ○手指を口に持っていってなめる ○視野に物を差し出して見せると、注視する ○物音にびくっとしたり、目を覚ましたりする ○眠りに入るようなまどろんだ状態の時や、浅い眠りの状態の時に、口角があがって微笑む ○母乳やミルクを飲む時、排泄時以外はほとんど眠っている	○手の指を硬く結んでいる状態から、徐々に握りがゆるくなり、手のひらに置かれたものを握るようになる ○仰向け姿勢で、手と手、足と足を触れ合わすなど、正中線に向けて内側方向に対称的な動きをするようになる ○首が座り始め、仰向け姿勢で正面を向くようになり、自分で少し首を動かして左右を見回すようになる ○うつ伏せの状態にすると、頭を少し持ち上げる ○手と手、手と口の協応ができ始める ○周囲の動く物を追視できるようになる ○１日の中で、眠りと覚醒が何度も繰り返され２時間くらい続けて起きられるようになる ○舌の前後の運動で、ミルクや母乳をよく飲むようになる
この時期は、一人ひとりの生活リズムに合わせて、生理的欲求を満たし、気持ちよく過ごせるようにする		経験させたい主な活動	・音のなる玩具を目で追ったり、触ったりする（ガラガラ、吊玩具等） ・肌触りのよい素材の玩具を触ったり、握ったりする（タオル人形、布ボール、握りやすい玩具） ・ふれあい遊びをする（赤ちゃん体操、くすぐり遊び、ベビーマッサージ） ・体調、機嫌がよい時は、外気に触れる